

指導班だより

令和8年度がスタートし、各幼稚園・小中学校では順調にスタートされたようです。また、園・校内研究においても、研究のゴールとして目指す幼児・児童生徒の姿を共通理解し、研究概要等をまとめて計画的に研究が行われているようです。今回の指導班だよりでは、4月21日（火）に悉皆研修として行った研究主任研修会について掲載いたします。

令和8年度研究主任研修会について（大河原教育事務所独自悉皆研修）

本研修会では、幼稚園、小中学校の研究主任の皆様から、研究の進め方や主題設定、校内の協働体制づくりに関する多くの学びや気づきが得られたとの声をいただきました。特に「研究は一人で抱え込まず、全員で取り組むもの」という共通理解が深まり、他校との情報交換が大きな刺激となったことが伺えました。また、年度初めの多忙な時期ではあるものの、この時期だからこそ研究の方向性を明確にできたという意見が多く寄せられた研修会となりました。今回の学びを自園・自校の研究推進に生かし、協働的で前向きな教員文化づくりにつなげていただければ幸いです。

○研修会アンケート結果（内容「今回の研修会は、校内研究の充実を図るために役立つものでしたか。」）

	役立つ	概ね役立つ	あまり役立たない	役立たない
人数(人)	54	10	0	0
割合(%)	84.4	15.6	0	0

（研修会参加者64人、回答率100%）

○各講義等について

- 1 講義1では「協働的な校内研究を目指して」と題して、指導主事より講話を行いました。校内研究を教職員全員の協働で進め、目的や方向性を共有しながら授業改善を図る重要性を示しました。また、研究主題の明確化、計画的な授業研究、事前・事後検討会の充実、子どもの学びに基づく検証、柔軟な研究改善などを通して、学び合う教員文化をつくることを強調しました。

※下記は講義1での研修会参加者の声をまとめたものです。

- ・研究は「一人で抱え込むものではなく、全員で協働して進めるもの」であるという認識が強まった。
- ・研究主任の役割が明確になり、見通しをもって進める重要性を再確認した。
- ・教職員間の共通理解の形成が不可欠であり、研究の方向性や目的を共有する必要性が示された。
- ・意見を言いやすい環境づくりや、批判ではなく代案を出し合う姿勢など、組織風土の改善が求められている。
- ・研究授業や事後検討会の在り方が整理され、授業者を孤立させない支援体制の重要性が強調された。
- ・次期学習指導要領の論点整理を踏まえた研究の方向性を理解できた。
- ・初任者・経験者ともに、研究主任としての不安が軽減され、進め方のイメージが具体化した。
- ・事実に基づく見取りや成果の構築方法が分かりやすかった。
- ・自校の研究計画と照らし合わせて、改善点や不足点を見つける機会になった。

- 2 講義2では幼稚園等・小学校部会と中学校部会の2つの部会に分かれ、昨年度の指導主事訪問で特色ある校内研究をしていた園・学校の代表に「特色ある校内研究の取組」として発表いただきました。

※発表した園・学校の校内研究の特色

かわさきこども園	角田小学校	村田第二中学校	大河原中学校
研究が単なる形式ではなく、子どもの実態を起点（保護者アンケートを基に、地域や子どもの実態を丁寧に分析）に、保育の質を高めるための実践的な研究へと深化していた。	研究の方向性が明確で、全教職員で共有しやすく、児童の学びの深まりと授業改善の方向性が具体的に見える研究となっていた。また、校内学習アンケート結果から引き続き4年の校内研究に入った柔軟さ、授業記録と授業参観シートは参考になった。	全教職員が共通の視点で取り組める体制が整っており、客観的データを活用して研究の方向性を明らかにしていた。また、視点を生徒の学習活動に関するものと教師の指導改善に関するもので分けることや村田二中学習サイクルとアンケート調査分析は参考になった。	全教科で取り組む協働研究を成立させるための「共通理解」と「教科の専門性」の両立が図られ、全教科で協働しながら、研究主題を教科の特性に応じて具体化していた。また、ルーブリック評価の活用、大学の先生の文献を研究に取り入れていた。

※下記は講義2での研修会参加者の声をまとめたものです。



- ・他校・他園の具体的な研究実践を知る貴重な機会となり、自校への応用を考える視点が広がった。
- ・幼保小中の連携を意識し、子どもの主体性や学びのつながりを実感できた。
- ・研究の成果だけでなく、課題や失敗例も共有されたことで、研究主任としての視点や進め方のヒントが得られた。

- ・「委ねる」「主体性を引き出す」など、子ども理解に基づく授業づくり・環境づくりの重要性が再確認された。
- ・研究主題・副題の捉え方や、教員間の共通理解の必要性が明確になった。
- ・研究を進める上での悩みや困難が共有され、協働で取り組む意義を改めて感じた。

3 グループワークでは、令和7年度の研究教科、指導主事訪問の形態、研究年次等の近い学校で3～4人のグループを作り、「校内研究の情報交換等」を行いました。

※下記はグループワークでの研修会参加者の声をまとめたものです。

- ・他園・他校の研究実践や課題を知ることで、自園・自校の研究を見直す視点が得られた。
- ・研究内容・進め方・悩みを共有し、共通点や違いから学びが深まった。
- ・子どもの主体性をどう育むかという視点が、校種を超えて共通して重要であると確認できた。
- ・幼児期の遊びの主体性が小学校以降の学びにつながるという認識が広がった。
- ・研究主任同士で悩みや困難を共有でき、研究推進への不安が軽減された。「自分たちだけではない」という安心感や、進め方のヒントが得られた。
- ・具体的な手立て（場の設定、問いの工夫、ルーブリック活用など）が参考になり、自校で取り入れたい点が見つかった。
- ・研究主題・副題の捉え方や、教員間の共通理解の重要性が再認識された。
- ・研究を自分事としてもらうための工夫が必要だという共通の課題が見られた。
- ・校種を超えた交流により、幼保小中の連続性や接続の視点が強まった。
- ・幼児教育の実践が小学校の学びにつながることを実感した。



令和8年度 各学校の校内研究資料（小・中学校）QRコード

